



2月

今月の江戸しぐさ「草主人従」

日本人は古来から自然を敬い、恐れ、共に生きることを良しとする民族でした。実はこのような自然自体を崇拝する民族は先進国では希です。

生命の誕生以来、猿から人類にいたる過程で広葉樹に守られて進化した無意識の記憶と、針葉樹を生活の基盤とした感覚、石などの自然に神性を感じるなど、自然と共に生きることがこちよいと感じていました。

旧約聖書創世記第1章に書かれてあるとおり、自然を支配の対象と認識する欧米の人達との違いは、日本の多くの寺社のたたずまいとベルサイユ宮殿の風景を比べると良くわかります。

「草主人従」はその文言のとおり、人は自然のなかで生かされているという謙虚で健全な考え方が凝縮されています。

病院は人の病を癒す場所です。決して合理性一辺倒の、機械的でない、自然のたたずまいを失ってはいけない場所だと思います。

長汐病院中庭の大島桜の白い凜としたたたずまい。セミの喧騒。

武南病院のどうどうとしたプラタナス。すずめの喧騒。

附属クリニックのケヤキの力強さ、タンポポの黄色。よいものです。

※江戸思草は、江戸時代の町民が良いとされること、悪いとされることなどの生活の規範としていたものです。

判断の基準は粋かどうかだったようです。

粋の概念は武士の武士道に対抗するものだったという説があります。他の国にない、一般庶民の高度な精神性が、当時日本に来た外国人に驚きをあたえていたことが多数記録されています。

ヘレン・ハイド

Helen Hyde(1868~1919)

日本を愛したアメリカ人版画家。

江戸の風情が強く残っていた明治期に10年以上滞在し、女性の視点から愛らしい子供の作品をたくさん残してくれました。

当時の外国の観察者の多くが、西洋諸国と子供の様子や子育ての考え方が根本的に異なっていることに驚いていました。



あいさつ